

リサーチセンター研究成果報告書

センター名	人間・ロボット共生リサーチセンター
センター長名	岡田 美智男
設置の時期	平成 22 年 4 月 1 日
報告書作成日	平成 30 年 12 月 28 日

1. 設置の目的

本学は、高専時代にロボコンやプロコンなどを経験した「モノづくりマインド」にあふれる学生が数多く集まり、また機械工学、制御工学、情報工学、電気・電子工学、建築工学などの広範な分野でロボット関連技術の研究開発に携わる数多くの教員を擁している。

こうした背景に鑑み、本人間・ロボット共生リサーチセンターでは、これらロボット関連分野での最先端の研究成果を活用しつつ、国・地方公共団体や医療機関、国内の企業と連携を図りながら、人と共生するロボットやロボット関連技術の発展的実用化を進め、学術分野、教育分野ならびに地域産業への貢献を目指すことを設置の目的としている。

2. 設置後の研究成果

本リサーチセンター設置後の主な研究成果は、次のとおりである。

- (1) 平成24年度から28年度までの5年間、文部科学省概算要求特別経費として「豊かな超高齢化社会のための次世代スマート介護ロボット・システムの研究」を推進した。

それにより、全方向型駆動機構による全方向移動車いす、2輪ビークル、免荷式歩行訓練ロボット、特定筋肉リハビリロボット、VRによる介護訓練システム、自律走行案内搬送ビークル、パワーアシスト移乗機器、案内ロボット、コミュニケーションロボット、知的照明、空間・環境センシングのネットワ

ークシステムの構築等の研究を行い、人と共生するロボットとそのための要素技術を発展させた。

特に、福島県立医科大との共同開発である病院内回診支援ロボット「セラピオ」は、産学連携プロジェクトで開発し、医療機関やマスコミでの注目を浴びた。

- (2) 平成28年度から30年度までの3年間、愛知県の「知の拠点」あいち重点研究プロジェクト(第二期：次世代ロボット社会形成技術開発プロジェクト)に参画し、「介護医療コンシェルジュロボットの研究開発」、「施設園芸作物の収穫作業支援ロボットの研究開発」、「愛知次世代ロボットの産業化・市場創出を推進する要素技術開発」の3つのテーマでの研究開発を推進した。

主たる成果として、要介護者の日常的な運動や歩行訓練などのリハビリテーションを支援するロボット「ルチア」の実用化開発を進めた。また、愛知県、特に東三河地域の農業振興のため、ロボット技術を収穫の現場へ導入することを目的とし、シンフォニアテクノロジー(株)と共同で、大葉(愛知県全国シェア6割)の選別、結束工程を自動化するロボットと、花き(バラ、キクなど出荷量全国1位)の収穫を補助する自律移動ロボットの商品化開発を進めた。

- (3) 平成28年度から30年度までの3年間、本学の技術科学イノベーション協働研究プロジェクトにおいて、「関係論的なロボットの社会実装研究プロジェクト」、「豊橋技科大-アスモ 先進モーションテクノロジー研究プロジェクト」、「リサイクルセンターで利用可能な屋外清掃ロボットの開発」、「生産ラインの高効率化を実現する人協働・自律搬送システムの開発と運用」の4つのテーマで、オープンアプリケーション方式による企業との共同研究プロジェクトを推進した。特に、ワイパーなど自動車用小型モータの先進モーション制御技術は近い将来に実車に実装することが期待されている。

- (4) 国内有力企業、地方公共団体とのロボット関連技術に関する共同研究を推進した。主な共同研究先として、トヨタ自動車(株)、アスモ(株)(現在、(株)デンソー)、シンフォニアテクノロジー(株)、新東工業(株)、パナソニック(株)、(株)東京ウェルズ、大同特殊工業(株)、東洋メタル(株)、トヨオカ(株)、タジマ工業(株)、有楽製菓(株)、H. I. S ホテルホールディングス(株)、(株)フカミ、(株)デジタル・フロンティア、豊橋市など多岐に亘っている。

- (5) 人と共生するロボットのコア技術としては、多指多関節マッサージハン

ドによるインテリジェントマッサーロボットの開発、物体探索のための視覚認識技術、遠隔操作技術、超小型超音波モータ技術、デジタル照明技術、センシングやIoTに関する研究開発を推進した。

- (6) 共通プラットフォーム（トヨタ HSR）を用いたサービスロボットの国際競技会に継続的に参加している。H29年度は RoboCup@Home に参加し4位であった。H30年度は経産省・NEDO の主催する World Robot Summit (WRS) 2018内で実施されたパーソナルロボットチャレンジ（リアルスペース）に参加し、3位入賞するとともに人工知能学会賞を受賞した。
- (7) 人とロボットとの共生関係に関する基礎概念として、お互いの弱さを補いながら、それぞれの強みを引き出しあう〈弱いロボット〉の概念を提唱するとともに、「ゴミ箱ロボット」などの様々な〈弱いロボット〉開発し、ユニークなロボット研究としてメディア等で注目を浴びた。また平成29年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞(科学技術振興部門)を受賞した。
- (8) 本リサーチセンターの立ち上げから6年間の研究成果の一つとして、平成27年10月に『今後の超高齢社会に求められる生活支援（医療・福祉・介護・リハビリ）ロボット技術』（600ページ、情報機構）を出版した。
- (9) ロボット人材育成事業として、本センター設立当初から愛知県教育委員会主催のあいち理数教育推進事業「知の探究講座」を本センターのメンバーを中心に開講してきた。また、文部科学省産学連携による実践型人材育成事業、文部科学省理数学生応援プロジェクトを通して、学内のロボット人材育成を進めてきた。
- さらに、10数校との高専と本学の遠隔ネットワーク実験事業を展開し、遠隔技術の発展とともに、高専の学生実験教育に貢献してきた。
- (10) 公開シンポジウム、定例研究会、本学一般公開講座を開催するとともに、各種メディアの取材対応、見学対応、展示会等での各種ロボットのデモ展示、招待講演等などを通して、本リサーチセンターで進める人と共生するロボット技術の普及、振興に努めた。

3. 今後期待される効果

愛知県の「知の拠点」あいち重点研究プロジェクトの第二期として、「介護医療コンシェルジュロボットの研究開発」、「施設園芸作物の収穫作業支援ロボットの研究開発」、「愛知次世代ロボットの産業化・市場創出を推進する要素技術開発」などの3つのテーマに中心に関わってきており、愛知県を中心とするロボット産業クラスターの形成に貢献してきた。これらの成果は、今後、地域企業との産学連携を加速するものである。

また、本学は高専卒業生を数多く受け入れており、引き続き、高専時代にロボコンやプロコンなどを経験した優秀な学生を引き付けるためには、本学の人間・ロボット共生リサーチセンターの役割は増々大きなものとなっている。

これまでも、新聞やテレビ、雑誌などのメディアに本センターの活動やロボットが取り上げられることが多く、本学のプレゼンス向上に寄与している。最近では、ロボット技術や人工知能を学びたいとして本学を受験する学生も増えており、全国から優秀な受験生の応募が期待される。

*この報告書は、評価の後公表します。